



実践報告を行う老富の西田さん（左）と古屋の渡邊さん（右）

グローバル化という名のもと、どんどん「同じ」方向へ向かって動いていることに警鐘を鳴らす。人は同じ方向へ向かうことで安心し、平らに慣らされた社会が、経済的に合理的な素晴らしい世界であるかのように錯覚している。しかし、同じというのは、頭の中、意識の中でとらえたものであって、実際には具体的に「同じもの」は世界中どこを探してもない。あるとしたら、それは劣化しないコピーやデジタル、コンピュータの世界。しかし、人間の細胞は日々変化し、7年経つと完全に入れ替わるとさえいわれている。昨日と同じ人間など存在しないのだ。普遍的な0と1のアルゴリズムで作られた情報社会は、現実的で効率的かも知れないが、コンピュータでも置き換えることができる世界に過ぎない。

だからこそ今、「人間が何をするか」が問われているのだという。そのうえで、「違いがわからないと地域の未来はない」と語る。地域の最大の問題は、頭の中の価値観が都会化しているということ。地域として存続していくには、他のどことも同じではダメで、まず住民が「違いのわかる感性を磨くこと」が大切だと強調する。

「人間らしく本気で生きること」、それは容易なようで難しい。養老

## 過疎と向き合ってきた10年

水源の里の10年間の歩みを紹介するビデオ上映に続く実践報告では、水源の里発足当初から精力的に集落振興に取り組んできた「水源の里 老富」代表の西田昌一さんと「水源の里 古屋」代表の渡邊和重さんが登壇し、それぞれ発表を行った。西田さんは、廃村の危機に直面し諦めムードが漂う中、水源の里条例で集落に一筋の光が差したという。「今がチャンスだ、やろうやないか」と一気に気運が高まり、特産品の開発・販売や都市農村交流を中心に取り組んできた。今では、「住民に目標ができて地域全体が活気づき、笑顔と笑い声が山間に響き渡っている。これからも明るく元気に無理をせず、長く活動を続けることを約束したい」と語った。渡邊さんは、自身が東京から戻った12年前は、まさに「山が泣いている、川が泣いている」という状態の寂しい集落だったという。しかしやはり「私たちの代で廃村にしたくない」という思いから、地元・行政・ボランティアが三位一体となり活動してきた。「今

の発展があるのは多くの協力者のおかげ。一人じゃない、社会に必要とされている、気にかけてくれる人がいると感じることで集落はまだまだ頑張れる」と語った。それぞれの取り組みは徐々に実を結び、古屋には柿の実の収穫作業や獣害対策などに年間700人近くのボランティア（交流人口は3千人）が訪れ、老富などが作る特産品のとち餅は年間約1万5千個を出荷するまでとなった。

その後のパネルディスカッションでは、四條畷学園大学の嘉田良平教授をコーディネーターに、島根県中山間地域研究センターの藤山浩さん、フリーアナウンサーの小谷あゆみさん、山崎市長の3名により「水源の里のこれから10年をどうデザインするか」などについて、活発な意見交換が行われた。藤山さんは「地元の作り直しのポイントは、1%の消費を地元で作りきればいいということに住民が気付くこと。どれだけ頑張ればいいかが分かれば、地域は頑張れるし、それだけで循環型社会も作れる。そして、日々の暮らしを大切にすること。地域がよくなるには、自分だけ、今だけ、お金だけ、じゃない人が必要だ」。小谷さんは「現代は一億総メディアの時代。水源の里の活動支援はボランティアだけでは限界がある。若者がSNS

で発信したくなるような自分が輝けるツーリズムにもっていくことがキーになるのではないか」。山崎市長は「今の田園回帰の動きは本物だと感じる。これまでやってきたことは間違いかなかった。今後は、親や祖父母世代にも、子ども達に胸を張って『故郷に帰って来い』と言えるふるさと教育を浸透させるとともに、他と差別化を図った定住促進施策に取り組んでいきたい」と語った。会場からも活発な意見が出され、「新しい時代を水源の里から創り出す」というテーマ

に相応しい、熱のこもった討論会となった。

## 特色あふれる地域おこしを見学

シンポジウムの翌日は市内6コースで現地視察が行われ、約100人が参加。水源の里探求コースの橋上・市志には20人が訪れた。18戸44人が暮らす橋上では、ほぼ全世帯できゅうりを栽培。苗から無農薬で育てた漬物専用品種「シャキット」で作られる「きゅうり漬」の製造



第8回全国水源の里フォトコンテスト入賞作品の展示



会場での特産品販売も好評を集めた



パネルディスカッションの様子



次回開催地の滋賀県米原市の平尾市長と握手を交わす山崎市長